豊岡短期大学論集　No.14, 497～506（2017）

童話作家としての北條民雄

高　崎　由　理

Hojyo Tamio as a juvenile story writer

Yuri Takasaki

豊岡短期大学 論集
第 14 号　別 冊
平成 30 年 2 月 28 日　発 行

童話作家としての北條民雄

Hojyo Tamio as a juvenile story writer

高崎　由理

Yuri Takasaki

はじめに

先頃、国立ハンセン病資料館を訪れた際、北条民雄の童話をもとにした絵本 2 冊を頂いた。文　北条民雄　絵　山崎克己：すみれ、国立ハンセン病資料館　2015 年（以下『すみれ』）および、文　北條民雄　絵　おぼまこと：かわいいポール、国立ハンセン病資料館　2016 年（以下『かわいいポール』）である。

この 2 冊は、北條民雄生誕百年を記念して資料館が刊行した非売品であるが、筆者はこれに対してさまざまな読みが行われ、鑑賞されることが必要と考える。その理由の一つは、絵本化によって絵がついたことである。そこには、没後 70 年以上経っている北條と、現代の画家の交感があるに違いない。我々は、画家の読みという発信を受け取るべきである。二つ目は、それらが子どもの読める形に生まれ変わった意義である。もちろん、この二作品は北條の全集に収録されており、大人なら現代でも容易に読めるのであるが、本来の執筆意図は子どもに読ませる、あるいは読み聞かせることであるから、子どもの読み物としての検討を加える必要もでてくるはずである。

本稿では、北條の日記や小説、その他の資料を援用して一つの読みを示すとともに、試みに学生への読み聞かせを行ったので、その結果を報告する。

1.　関係事項年譜

最初に、『かわいいポール』と『すみれ』に関係する事項の年譜を掲げる（表 1）。

『かわいいポール』読解には、作者北條の子どもに対する感じ方・考え方を知ることが必要と考えられる。そこで、この年譜では北條の作品や日記から子どもに関する記事を抜き出した。

また、『すみれ』は北條の父や祖父を思わせる「じいさん」が主人公であることから、同様に父や祖父に関する記事を抜き出すとともに、花が副主人公であることから、北條の花や植物に関する感じ方を表す文をも抜き出している。

年（西暦）	年齢（数え）	月（日）	事項	記述概要	全集p
1934(s9)	21				
		5月18日	『発病』『柊の垣に囲まれて』	父に付き添われて全生病院に入院。	上415など
			『柊の垣に囲まれて』	「花といふものを、しみじみ、美しいなあ、と感じたのは、この病院へ入院した次の日であった」	下80
		6月		『童貞記』執筆。主人公は男児。	年譜
		7月13日	日記7月13日条	盆踊り、百合舎の女の子たちの無心な踊りに「自分は真実泣かされた」	上147
		8月13日	川端康成に初めて手紙を出す		年譜・書簡
		8月	日記8月28日条	「老いた祖父からの便り」により、離婚した妻の死を知らされる	上155
		9月19日	日記9月19日条	プルースト作中の少年少女のような気持ちで人生を夢見たいと考える	上164
		10月12日	川端康成、北条に初めての返信を書く		年譜・書簡
		10月23日以前	日記10月23日条	「『呼子鳥』の第三号に童話六枚ばかりを書いた。」	上168
		10月	『可愛いポール』を『呼子鳥』に発表	ミコちゃんが子犬のポールを救う童話	上332
		12月8日	日記12月8日条	「久振に故里の父に手紙を書く」父は「心の底には常に深い愛情をたたへてゐた」	上171
		12月12日	日記12月12日条	「菓子も食ひたい。すてきなカステーラを食ひたい」	上173
		12月19日	日記12月20日条、『すみれ』のことであろう	『呼子鳥』に載せる童話の締め切り日だ。昨夜どうやらまとめたので……」	上173
1935(s10)	22				
		1月21日	『孤独のことなど』	誰でも心を動かされるものの代表として「不幸に打ちくだかれた可憐な少女を見た時でも」	下98
		1月末	『すみれ』を『呼子鳥』第四号に発表	子供向けの作品は『すみれ』のみ（編集後記）。この頃、北條は二日間の予定で東京に出かける。	『呼子鳥』
		2月27日	『書けない原稿』	「子供といふものは僕は元来好きだし、はね廻つたり、悪戯をしたり……見ると、もう堪らなくなるくらゐだ。光岡君から何か書けと言はれてからもうかなりの比が経つし、それに締め切りも近いので……実際、子供のことは書けない。とりわけ癩院の子供たちを眼の前に浮べながら書くとなると、……病み重つて行く、あの子供たちを前に置くと、或はまた、土地から直かに生え出して来たやうな子供達を、空から突然降って来た天使のやうな女の子を前に置くと……」	下129～131
		6月25日	日記6月29日条	「紅の一輪を見つける……やがて自分は土になるだらう。さうすると自分のこの身からも、草が生えたり、花が咲いたりするだらう……もう僕は、自然物なんだ。精神を持たぬ一個の物質、物それ自体なんだ……自然その物なんだ！」という模擬死の経験	上193
1936(s11)	23				
		3月初	続癩院記録	「十一二歳の少年が入院した」	下23
		3月13日	川端康成宛書簡、『続癩院記録』	「ハルちゃん」（9歳）入院。ハルちゃんは、父親を乗せた車を犬に引かせて乞食していた。犬と父親も入院したが、ほどなく、ハルちゃんの父逝去。	下356、下36
		8月9日	日記8月9日条	「まだ十歳に満たぬ子供ですら死を考へてゐるのである」	下252
		この年9月か	「表情」	子どもたちが秋の運動会の練習をしているのを見る。「これは私にすくなからぬ明るいものを見せてくれた」	下83
		11月以前	『続癩院記録』	子どもの作文（『愛生児童文芸』）の紹介、全生病院に入院してくる子どもたちの紹介、「私の病院には今百名あまりの児童がゐるが……」	
1937(s12)	24				
		1月29日～2月14日	『重病室日記』×月×日	右腕の神経痛で七号病室に入室中、「ハルちゃん」来訪。リンゴを与える。	上292
		3月21日	日記3月21日条	「今は一輪の花、一羽の小雀を与へよ。さらば我は天使の如く生きん」	上273
		8月12日	日記8月12日条	「光岡を六号病室に見舞ふ。……八号では百合舎の女の子が死にかかつてゐる」	上279
		8月15日	『望郷歌』脱稿	全生学園の教師「鶏三」を語り手とする小説。入院までの悲惨な経験によって心を閉ざなくなった男児「太一」と、鶏三を「先生、先生」と慕い、清らかな声で歌ったり無心に遊んだりする女の子たちとが登場する。	下418
		9月30日	『続重病室日記』	同室の女の子（十六、七歳）が丹毒になった	上310
		11月	『望郷歌』『文藝春秋』12月号に載る	北條最後の作品は学園の子供達を描いた小説であった	下418
		12月5日	北條、腸結核により逝去		

表１　『かわいいポール』『すみれ』関連事項年譜

2、『かわいいポール』について

それでは、表を参照しつつ、作品の内容を紹介する。絵本としての刊行は『すみれ』が先であるが、原作の発表順に『かわいいポール』（本論文では、題名、本文共に絵本から引用する。北條の原作は旧かな漢字交じり）から紹介する。

作品は、「ミコちゃんの　こいぬは、ほんとうに　かわいいものです」と始まる。「なまえは　ポールといいます。（中略）ポールというのは、フランスの　うつくしいおうたをつくるせんせいの　おなまえです」と続く。

発表が 1934 年であり、当時とは日本語の言い回しに変化があることを考慮しても、「かわいいものです」という言い回しは冒頭の一文として洗練されていない。

また、犬の「ポール」という名前の由来が、作者の好きな作曲家の名前（『魔法使いの弟子』などを作曲したフランスの作曲家、ポール・デュカスのことであろう。このこと

は、絵本の後ろ見返しに成田稔［国立ハンセン病資料館館長］が記した「『可愛いポール（童話）』をお読みのお子様にいつか知らせていただきたいこと」の中にも指摘がある）をつい出してしまったのであり、いかにも若書き（作者は数え歳 21 歳）という印象を与える。

だが、このとき北條が一人一人の子どもたちの顔を思い浮かべつつ執筆していたと考えれば、別の読みも可能である。

北條はこの年（1934 年）5 月 18 日に全生病院に入院した[1)]。入院当日より親交のあった光岡良二は、北條の文学仲間であると同時に、病院内の子どもたちが通う学園の教師であった。

当時はハンセン病の特効薬がなく、日本では患者を全員強制入院させる隔離政策が行われていたため、子どもたちが社会復帰できる可能性はなかった。そこで光岡は、子どもたちに必要なのは社会で通用する学問などよりむしろ、自己の思いを表現する作文教育であると考えて力を入れるとともに、子どもたちに読み物として童話を与えようとしていた。

『かわいいポール』は、こうした意図をもつ光岡の依頼により執筆され、病院内の児童学園機関誌『呼子鳥』に掲載されたものである。

北條自身は児童学園で教鞭を執ることはなく、ひたすら文学に精進しようとしていたが、表 1 からわかるように、子どもたち、特に女の子達に温かな目を注ぎ、また反対に女の子達の清らかさに支えられる面もあった。

たとえば、1934 年 7 月 13 日の日記[2)]（以下、北條入院後の生活および作品については、『定本　北條民雄全集』上・下によることとし、いちいち注さない）では、百合舎（「未成年の少女たちが寄宿した寮舎。現在は秩父舎〈北条民雄の寄宿した寮舎〉の隣にあるが、当時は今の福祉室の隣にあった。十二畳半四部屋で、二十人程度が生活していたと思われる」[3)]）の女の子達が盆踊りに興じる姿を見て、「自分は真実泣かされた」と書いている。

もう一つ、注目すべきなのは日記 1935 年 2 月 27 日の日付けがある、『書けない原稿』という文章である。この文章は、『呼子鳥』に載せる童話を書こうとして書けなくなった心情を語っている。次第に病重くなっていく、しかし「土地から直に生へ出して来たやうな」、あるいは「空から突然降って来た天使のやうな女の」子たちを見ていると、どのような言葉を掛ければ良いのかわからないし、ましてやその子どもたちに読ませる童話など書き得ないというのである。

そして実際、北條はこれ以後童話を書いていない。

つまり、入院後月日が経って、子どもたち一人一人が全生病院にやってくるまでの艱難辛苦を知るとともに、子どもたちの絶望的な将来が身に染みて理解出来た北條は、童話が書けなくなってしまったのである。

『かわいいポール』は入院から 5 ヵ月後の 10 月に執筆された。子どもたちとの交流もまだ深まっておらず、比較的軽い気持ちで書けたのであろう。しかし、7 月の盆踊りの記事からわかるように、北條の心にはすでに百合舎の女の子たちの天使のような姿が刻み込まれていた。

こう考えると、一見逸脱と見える「ポール」の由来設定も、個別の子どもと北條、あるいは光岡が交わした、音楽に関する話題に引かれてでてきたものにも見える。もしも、そうであれば、当の子どもはここを読んで、「この間聞いたお歌のことだ」と、思い当たってにっこりしたはずである。

3.『かわいいポール』の扱いづらさ

『かわいいポール』のあらすじに戻ろう。

ポールの可愛らしさの描写後、いよいよポール救出のてんまつが語られる。

主人公のミコちゃんは、「おとうさまの　おてがみ」を出しにポストまで駆けていったとき、野犬狩りに出会った。二人の男が多くのの犬を箱に閉じ込めて連れ去ろうとしていたところへ、生まれたばかりの子犬がふらふらと近寄って行き、捕まりそうになってしまう。

ミコちゃんが、「かわいそうだわ」と叫ぶと、子犬が無心にじゃれついてきたので、ミコちゃんは子犬を抱き上げ、男たちに渡すまいとする。だが、大人の力には勝てず、子犬は奪われてしまう。ミコちゃんは必死に、この犬は自分が飼うから返してほしいと主張するが、男たちは聞く耳をもたない。

万事休すというとき、「くろいマントをきた　やさしいおまわりさん」が突然現れて、子犬を救い出してミコちゃんに渡してくれた。

そして急転直下、エピローグとなり、ポールがいつもミコちゃんのおうちで「こうふくそうに」遊んでいることが語られる。

絵本では、お話が終わった後に、ミコちゃんの布団の中にポールがもぐり込み、ミコちゃんの顔をなめているらしいところを描く、文字のないページが付けられている。

画家によるこの処理には納得できる。『かわいいポール』は、発表時は大判の機関誌『呼子鳥』の第 1 面に一挙掲載されているが、その形で俯瞰すると、結びの部分が短すぎるのが目立つ。日記においても、『かわいいポール』については推敲したという記述が見えない（表 1、1934 年 10 月 23 日）。おそらく、北條（発表時のペンネームは秩父晃一）は、自分の趣味をもりこみつつゆっくりと語り始め、ポール救出のくだりでは興がのってつい長めに書いてしまい、制限字数に達しそうになったので急いで書き終えたのではないか。画家は文字のないページを付すことで、こうしたバランスの悪さを補い、物語に余韻を与えている。

実は、この作品を子どもに読み聞かせようとすると、更に大きな問題にぶつかる。

それは、野犬狩りについての描写である。野犬狩りは、戦後しばらく経つまで日本中で日常的に行われていたが、このことを現代の子どもに説明するのは難しい。また、野犬狩りに従事する男たちの形相を恐ろしげに描写し、「おそろしいふたりの　いぬごろし」と呼んでいる。ここには、北條の差別的なまなざしが感じられる。

学生（30 人程度）に対して読み聞かせをし、感想文を書いてもらったが、もっとも多くの「ひっかかり」が指摘されたのがこの部分であった（読み聞かせ対象者が少ないのでデータとしては使用で

きないが、おおまかな傾向として報告することはできるであろう)。

たとえば、「野犬狩りを職業にしていた人々にも、やむにやまれぬ事情があったはずなのに、一方的に悪くて恐ろしい人々とだけ描写されているのは納得がいかない」という感想である。

北條の生きた時代、野犬狩りに従事する人を差別する言説は非常に多かった。時代の制約ととらえれば、北條だけを責めるわけにもいかないが、北條は執筆時にはすでに、施設外の人々から差別を受ける立場であった。それを思うと、割り切れない気持ちにならざるをえない。

ここでも、画家は男たちの姿を比較的かわいらしく描くことで、その違和感を緩和しようとしている。もちろん、文章通りの風体で怖い顔をさせているが、顔つき、目つきは丸みを帯びており、子どもが見て震え上がるような姿形にはしていない。最後のページ同様、画家が工夫して物語の問題点を和らげてくれているところである。

4、誰に感情移入すればよいか

もう一つ、現代の子どもたちにとっては問題ないが、執筆時の学園の子どもたちがどう感じたか心配になるのが、「やさしいおまわりさん」のことである。

当時学園に通っていた子どもたちの中には、警察によって強制的に連れてこられた子どもたちもいたはずである。北條自身は父に付き添われて入院したのであるが、そういう子どもたちがいることを知らないはずがない。読者として予想される子どもたちの中に、「おまわりさん」に恐怖を感じる子がいると、北條は想像しなかったのであろうか。そういう意味で、ここも北條の配慮が行き届いていない部分と言えるだろう。

しかし、ここで時の氏神宜しく登場して男たちを黙らせ、問題を解決してくれる大人としては、一般的にも「おまわりさん」以外には思いつけない。今は、「疑問の残る点」として指摘しておくのみにする。

さて、『かわいいポール』について筆者が特に興味をもっているのは、「読者は、このお話の中の誰に感情移入しながら読むのが自然か」という点である。

ポールであろうか。たしかに、『かわいいポール』という題である。子どもたちが、物語に登場する小さきものに感情移入することも自然であろう。

実はこの絵本には、以下のような読みも示されている。

前述の成田稔は、『かわいいポール』の投稿時期が、川端康成からの初めての手紙を北條が受け取って約十日後であることに着目し、「この童話の中の『ミコちゃん』こそ川端であり、古典音楽が好きな北條が、『アリアーヌ』のポール・デュカスからとった『ポール』は自分自身としますと、抱きしめられているような嬉しさがよくわかるでしょう」と、述べている。

さらに、成田は野犬狩りで箱に閉じ込められ、泣き叫ぶ子犬（ポール）の描写も、自由にものを書く環境を奪われた北條の心理に「そっくりです」と理解している。

これは魅力的な読みである。しかし、文学史上における北條と川端の「美しい物語」[4] に精通している大人でなければ、こうは読めない。しかも、北條が『かわいいポール』を書いた時点では、まだ「美しい物語」は始まったばかり、初めての往復書簡が交わされたばかりなのである。そこで、ここではあえて、執筆当時読者として予想されていた子どもたちはどう読んだだろうかと考えてみたい。

筆者は学生に対し、北條の作であることを告げずに読み聞かせを行い、感想文を書いてもらったが、ポールに感情移入した感想はなく、ミコちゃんに感情移入する学生がほとんどであった。筆者自身もそうである。「おとうさま」のお使いで冬の町を走り、子犬に同情して大人の男たちに立ち向かい、子犬を奪い取られて絶望し、「おまわりさん」に子犬を取り返してもらい、何度もお礼を言うミコちゃんのけなげさに我々は涙を誘われる。そのように書いてあるからである。

他の登場人物は全て舞台上の書き割りにすぎず、ミコちゃんだけが心を持ち、生き生きと躍動している。ポールの行動については、ミコちゃんの視点から理由が推測されているが、決してポールが擬人化されているわけではない。あくまでも犬は犬として書かれている。それは冒頭における、ポールがミコちゃんに絶対服従で、「どんなところでも　けらいのように　ついていき」、「どこにいても　ポールは　いちもくさんに　かけてきて、ミコちゃんの　めいれいを　まって」いるという紹介の段階から決定的である。

当時の全生学園でこの童話を読み聞かせられた子どもたちも、おそらく大多数がミコちゃんに感情移入して聞いたであろうことは、かなりの蓋然性をもって言えるはずである。

5、子どもたちの夢を生きるミコちゃん

全生学園の子どもたちが、ミコちゃんに感情移入しつつこの物語を読む、あるいは聞くとき、起こることを想像してみたい。

ハンセン病の特効薬がないこの時代、全生病院の子どもたちは、決して家に帰ることはできなかった。「おとうさま」のお使いをすることもないし、かわいい子犬を飼うこともない。子犬の命を救うヒーローになることも、それでご近所のおばさんたちに褒められることもない。この子どもたちは、故郷ではいなかったことにされている。数年以内には病気が進み、視力を失ったり手足を失ったりする可能性が高い。何年生きられるかもわからない。この子どもたちにとって、親と一緒に家で暮らしているミコちゃんは夢そのものである。

この物語に反発し、自分には関係のない、幸せな子どもの話など読んでもしかたがないと思う子もいたであろう。だが一方には、この物語に触れている間、ミコちゃんになりきってハラハラしたり、勇気を出して立ち向かったり、その報酬として子犬とご近所の称賛を得たりという経験を、心の中でした子どももいたはずである。つかの間であっても、現実の境遇から抜け出して幸せを味わった子もいたと考えられる。

『呼子鳥』に載った子どもたちの作文は、発病によって家族と引き裂かれ全生病院に収容された、

恐怖と悲しみの記録で埋め尽くされている。光岡は、その子らにも一般社会の子どもが読むのと同じ物語を読ませたいと願い、北條に執筆を依頼した。少しでも健全な心を保って生きるには、悲しみを吐き出すための作文と、夢にあふれた物語を読むこととの両方が必要だと、賢明な光岡は悟っていた。『呼子鳥』には、しばしば院外から『赤い鳥』が寄贈された記録が載っている。一般社会の童話も全生学園の子どもたちには必要だった。一方、ここに暮らす子どもたちだけのために書かれた童話も必要であり、それは全生病院内では北條にだけ書けるものだったのである。

6、北條の童話第二作『すみれ』

『すみれ』は、『かわいいポール』のわずか2ヵ月後に書かれた童話であるが、趣は異なっている。

まず、文章や構成の上で破綻が少ない。主人公は子どもではなく一人暮らしの老人である。他の登場人物はなく、老人の庭に咲いたスミレの花が擬人化されている。非常にひっそりとした物語であり、『かわいいポール』に比べて相当年長の子どもを対象にしているようだ。

この作品も、簡単にあらすじを紹介しよう。

主人公の「おときちじいさん」は、深い山奥で暮らしている。「三ねんばかりまえ」におばあさんが亡くなり、「ことし　はたちになるむすこ」は遠くの町へ働きに行ってしまったので、じいさんは一人でわびしい思いをかみしめており、それが高じて仕事も手に着かないありさまであった。

ある日じいさんは、「『そうだ！　そうだ！　わしは　まちへいこう。まちにはでんしゃだって　きしゃだって、まだみたこともない　じどうしゃだってあるんだ。それから　したのとろけるような、おいしいおかしだって　あるにちがいない。そうだそうだ！　まちのむすこのところへいこう』」と決心し、翌朝さっそく支度を始めるが、庭の片隅に「しょんぼりと　さいている」小さなスミレの花を見つける。

じいさんは、スミレがあまり寂しそうなのに心を惹かれ、町へ行くのを忘れて世話を始める。スミレはじいさんの語りかけに答えるようになり、雄大な自然を眺めつつ一人生きる幸福を語る。じいさんは「なんというおまえはりこうな　はななんだろう」と感嘆し、町へ行くことをやめてしまい、「すみれといっしょに、すみきったそらを　ながれていく　わたのようなくもを」眺めるのだった。

この絵本には、『かわいいポール』にあったような現代における扱いづらさがないので、学生に対する読み聞かせではこちらを用いることが多かった（のべ対象人数は50人程度）。

代表的な感想は二種類ある。一つは、山崎克己の絵についての感想である。見返しにモノトーンで大きく描かれたスミレの絵にも迫力があるし、中を開くと折り重なる緑が溢れ、「おときちじいさん」の、いまにも植物にのみこまれて消えてしまいそうな姿が描かれている。「おときちじいさん」は白髪に狷介そうな鷲鼻の持ち主で、子どもが親しみやすいようには描かれていない。スミレの花は、あるページではピンクの着物を着た小さな小さな女の子として描かれている。「なぜ女の子として描いたページがあるのか理由がわからない」という意見が複数あった。

その疑問が生まれた原因は、あるいは文章の方にあるのかもしれない。スミレをみつけたじいさんが「おまえは　どうし　そんなに　さみしそうにしているのかね」と問いかけても、スミレは「だまってなんにも　こたえませんでした」と書いてあるのだが、しばらく先ではなんの説明もなく、「すみれは、うれしそうに　ほほえんで　『ありがとう、ありがとう』と　じいさんに　おれいを　いうのでした」と、笑ったり喋ったりするようになっているからである。

その後のページでは、まず、スミレを見つめるじいさんの頭から吹き出しが出て、中に女の子の姿が描かれ、女の子の姿はじいさんにだけ見えていることが暗示される。次のページでは吹き出しなしで女の子が描かれるが、その後は再びスミレの花としてのみ描かれる。画家は周到に手続きをふんでいるのだが、大人数への読み聞かせでは、絵をそこまで細かく読み取ることは難しいのであろう。

もう一つの代表的な感想はストーリーについてで、「じいさんは一度町へ行こうとしたが、スミレのおかげで田舎に留まることができて良かった。田舎は不便で退屈かもしれないが、都会にはない豊かさがあるはずだ。じいさんはそれを発見したのだ」と集約できる。数は少ないが、反対に「じいさんが都会の息子のところに行って話が展開すると予想していたのに違ったので、少しおどろいた」という意見もあった。

おそらく、前者の読みこそ、北條の意図であろう。面白いのは、前者のように読んだ学生の中にも、「そうは言っても、自分は都会に出てしまったわけだが」という述懐が、やはり複数あったことだ。

まさに北條もそういう若者なのであり、出身は四国の農家であるが、十代で東京へと出奔している。大阪を飛び越え東京まで行ったのは、かなり思い切った行動だったと思われる。兄の死や自身の結婚をきっかけに実家に引き戻されるが、文学への思いに駆られてはまた東京へと飛び出して行き、そのまま多摩の全生病院に入院したわけである。

おそらく、「おときちじいさん」が暮らしている「ひるでも　くらいような　ふかいやまおく」は、四国の山を念頭に描写されているのであろう。この山にはオオカミがいる。「おときちじいさん」には、四国に住む北條の父あるいは祖父の姿が重ねられているのであろう。

北條が『すみれ』を書いたのは 1934 年末だが、同年の日記には、8 月に祖父からの便りがあったという記事、12 月 8 日、父に手紙を書いた記事がある。複雑な家庭環境から、北條は父に対して疎隔の念を抱いていたが、この日は、父の心の底には深い愛が湛えられていたと綴っている。また、面白いことに 12 月 12 日の日記に「菓子が食ひたい。すてきなカステーラが食ひたい」と記している。上に引用した、じいさんの「おいしい　おかし」への憧れと日記とが直接響き合っている。

この頃北條の心を占めていた祖父や父への思慕と、カステーラなどハイカラな菓子を買い食いできる都会生活への渇望が、『すみれ』にはかなりストレートに表れている。とすれば、他の部分にも憧れや渇望がにじんでいるとみて良いだろう。

7、父の夢を生きる

これらの童話が書かれてから 3 年後、北條は死去した。父は、上京して全生病院を訪ね、北條の遺骨をひきとった。そのとき、光岡の書く字が北條の字にそっくりであることに気づき、「東京で元気に働いている」という息子の手紙を偽造して欲しいと頼んだという。それを、以前北條自身が宛名を書いた封筒に入れた上で故郷の人々に示し、息子は東京で働いていたが急病で死んだことにしたいというのである。

それは、息子が全生病院に入っていたことを隠し通す一方、遺骨を持ち帰るための窮余の策であっただろう。しかし、なんとも痛ましいことである。

「おときちじいさん」と北條の父を重ねて見るとき、じいさんの息子が都会で働いていると、他ならぬ北條自身が設定したことは恐ろしい。北條は、父が故郷で「息子は東京で元気に働いている」と、嘘をついていることを知っていたし、自分の死後も、父はそう思い込んで生きるだろうと見越していたのである。

では、スミレの花は誰なのか。もちろん、北條自身であろう。1935 年 6 月の日記に、北條はみずから地面に仰向けになって行った模擬死のことを書いている。このまま自分が死んだら、やがて土になりゆく身体から、「草が生えたり、花が咲いたりするだらう」と観じ、大自然と一体化する感覚を養った。『すみれ』を書いた 7 ヵ月後のことである。彼は日々に死と向き合っていたのであるから、実践前からすでに、草花となって自然と一体化する最期への志向がなかったとはいえない。

『すみれ』において、北條は父の夢を生きていると言えるだろう。北條の死によって二人の息子を亡くすことになる父は、四国の村に一人住みながら（「ひとりすみれの花」のように、「一人住み」と「すみれ」を掛けるのは、古今和歌集以来の伝統である）、「下の息子は東京で元気に働いているのだ、行こうと思えばいつでも息子のところへ行くことができる」と自分をだまして暮らす以外になかろう。しかし、やがて父は庭の隅にスミレの花を見つけるだろう。それは、すでに大自然と一体化した北條なのである。

結び

北條民雄の童話作品はたった二編のみである。執筆の経緯をまとめるならば、以下のようになろう。

まず、入院間もない頃、光岡の要請により、『かわいいポール』を書いた。この頃、すでに百合舎の女の子たちの清らかさに涙ぐましいものを感じていた北條は、女の子を主人公に選んだ。この作品は若書きで傷も多いが、学園の子どもたちの見果てぬ夢を生き生きと描き出した作品と言えるだろう。

2 ヵ月後、再び要請を受けて、『すみれ』を書いた。こちらは、北條の「死後」を生きる父の夢を描いた作品と読みうる。スミレの花は女の子の言葉遣いをしているが、実は自然と一体化した北條が、ひっそりと故郷の家の庭に帰ってきている姿である。『すみれ』は、読者である子どもたちから離れ、むしろ自己の思いに正直に書いた作品といえるだろう。

その直後にも、童話執筆の依頼はあったが、北條はもう書けなくなってしまった。それは、入院生

活が長くなるにつれて、子どもたちの艱難辛苦を深く知り、どのような童話で語りかけても無力であると感じるようになったからであろう。

北條の日記、作品、書簡にたびたび登場する（表 1 参照）「ハルちゃん」は、9 歳で父と犬とともに入院してきたが（「ミコちゃん」の家族も、父と犬である。この組み合わせが北條の心の琴線に触れるものがあったのだろう。ハルちゃんが入院してくるのは『かわいいポール』よりもずっと後のことなので、ハルちゃんはミコちゃんのモデルではない）、それ以前は病の重い父を乗せた車を犬と引き、物乞いをして生きてきた。父親は程なく死亡したが、ハルちゃんはそれを悲しむ姿を見せなかった。あまりにも過酷な人生が、9 歳の子どもらしい心を奪ってしまっていたのである。実際ハルちゃんは実年齢よりかなり年上に見え、しかも非常に美しい眼をもっていた。「――この少女は天国と地獄を同時に持ってゐる！――と僕は云ひました」と、ハルちゃんに初めて会った日、北條は川端に書き送っている。

このような、想像を絶する子ども時代を送ってきた、今もまさに送っている子どもたちの前で、北條はいったん言葉を失い、童話が書けなくなった。しかし、北條の子どもたちへの愛情は年ごとに高まり、しばしば川端に子どもたちの作文を送ったし、日記や作品中にも子どもたちの姿を書き残した。神経痛のため重病室に入っていたときも、ハルちゃんが遊びに来るとおしゃべりをしてリンゴを与えたし、その後病んだ光岡を見舞った折も、隣室で死にかけている女の子を心配した。死の床にあってさえ、同室の女の子が丹毒にかかったことにショックを受けたことが、日記や病床記からわかる。

北條の最後の小説は、『望郷歌』である。光岡をモデルとする学園の若い教師が、「太一」という、過酷な経験から心を開けなくなった男の子の心を理解するべく、無力感に耐えつつ努力を続ける物語である。天使のような女の子たちの描写も美しい。無力感ゆえに童話が書けなくなった北條は、愛する子どもたちの壮絶な命のありようを、この小説によって永遠にこの世に留めようと、最後の力を振り絞ったのであろう。

引用文献

1 北條民雄『定本　北條民雄全集　上』年譜は光岡良二作製　p 410～ p 419　東京創元社 1980 年。
2 北條民雄『定本　北條民雄全集　下』より『日記』p 145～ p 299　当該日付のページは表 1 参照。
3 山下道輔　荒井裕樹編『真筆版北条民雄日記　昭和十二年』発行者荒井裕樹　2004 年。
4 高山文彦『火花　北条民雄の生涯』p 369　株式会社飛鳥新社 1999 年。